

機関番号：14401

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520497

研究課題名 (和文)

韓国語コミュニケーション能力養成のための語彙学習用 Web 教材の開発

研究課題名 (英文)

Development of a Korean Vocabulary Courseware for Japanese College Students

研究代表者

竹蓋 順子 (TAKEFUTA JUNKO)

大阪大学・サイバーメディアセンター・准教授

研究者番号：00352740

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、研究代表者が構築した語彙指導法を基盤にしてコースウェアを制作することで、初級から中級の韓国語学習者が、基本語彙の発音の難しさを感じることなく、表現を聞き、発音しながら実用語彙を習得できるようにすることである。開発されたコースウェア (150 語の韓国語語彙学習教材) は、研究分担者の所属する大学における試用実験を通して、学習効果を検証するとともに、この指導法の英語以外の言語、特に韓国語の学習における有効性を検証し、指導法の普遍性を明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：

We developed an authoring tool with which we can create not only English vocabulary courseware for Japanese students, but any foreign language vocabulary suitable for anyone learning a foreign language. With the tool, 150 Korean vocabularies were selected and 15 sets of Web-based courseware were developed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：韓国語、語彙学習教材、Web 教材

1. 研究開始当初の背景

語学教育における IT 化が急速に進展し、英語やドイツ語、フランス語などの言語においては、インターネットを活用した授業や教材制作が活発に行われてきている。一方、韓国語においては、学習を希望する学生数が、近年、大幅に増えているにもかかわらず、教員数及び授業数には限りがあるため、学生が自律学習できるコースウェアに対する要望が高まっている。しかしながら、コースウェア化された韓国語の学習教材は極めて少な

く、学習者のニーズの高まりに応えられていないのが現状である。

韓国は、アジア圏であり、地理的に日本と近く、また韓国語と日本語は語順が一致するため、習得しやすい言語であるという観念が日本人学習者の間にあり、学習効果に対する期待は非常に高い。しかし現実には、韓国語の母音の数が日本語の母音の数より多いため、学習者は日本語に存在しない母音の発音を習得しなければならない。さらに、韓国語の語彙内における発音変化が 10 種以上に及

ぶことも珍しくなく、その習得は困難を極める。こうした理由から、初級、中級の日本人韓国語学習者は期待するレベルにまで韓国語によるコミュニケーション能力を伸ばさせられないどころか、基本学習語彙の聞き取りすら出来るようにならないことが大半であるのが実情と言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、研究代表者が日本人英語学習者を念頭において構築した語彙指導法を基盤にしてコースウェアを制作することで、初級から中級の韓国語学習者が、基本語彙の発音の難しさを感じることなく、表現を聞き、発音しながら実用語彙を習得できるようにすることであった。さらに、研究分担者の所属する大学で韓国語の授業を受講している日本人学習者を対象に、開発されたコースウェアの試用実験を行い、その学習効果を検証するとともに、この指導法の英語以外の言語学習での有効性を検証し、指導法の普遍性を明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究の代表者は、実用的な英語コミュニケーション能力の養成を目指し、e-Learningによる語彙力の科学的養成法及びその教材の開発に関する研究を長年にわたって続けてきた。そして、学習心理学、認知心理学、教育工学等の知見を踏まえ、独自の語彙指導法を開発した(竹蓋, 1999)。さらに、基盤研究(B)「外国語学習者のための語彙学習用 Web 教材の開発(課題番号:18320089)」(18-20年度)において、語彙指導の高度化を目指して研究を行っている。昨年度は、語彙教材の作成支援システムを開発した上で、英語の語彙教材を完成させた。そこで本研究では、その教材作成支援システムを活用して韓国語の語彙力養成用教材を開発する計画を立てた。

本研究の基本作業として必要とされる韓国語の学習語彙の選定については、研究分担者である曹が、基盤研究(B)「韓国語語彙データベース構築と外国語サイバー・ユニバーシティ用韓国語 WEB 辞書開発(課題番号:19320082)」(19-21年度)において開発したデータベースを活用する。つまり、研究代表者が構築した語彙指導法と、研究分担者の開発した韓国語データベースのデータを融合して、教材を制作する。これにより、本研究の課題である韓国語語彙学習教材の制作において、低予算で高い成果を見込むことが可能となる。これは、二つの研究を相互の視点から検証することをも意味し、研究の相乗効果を最大限に引き出した。

教材制作の基盤となる語彙指導法の特徴は、以下の(1)、(2)のとおりであり、教材作成支

援システムの特徴は(3)のようにまとめることができる。

(1) 高い定着率： 本指導法に則って制作された教材の試用効果は、図2のグラフに見るように、学習語彙の指導後14週間が経過した後も85%の語彙が保持されていることが分かる。しかし従来の学習法では、図2に示されているように、極めて低い定着率を示し、本指導法による語彙学習の有効性が示唆されている。

(2) 多面的な語彙知識の習得： 本指導法により習得された語彙は、音声で聞いて理解できる、適切な場面で適切なコロケーションを用いて発信できる等、語彙が多面的に習得されることが確認されている。従来の一面的な学習法では、「文章の中で綴りを見れば意味が推測できるが、音声で聞くと認識できない」など、実用的な語彙力が養成されないという欠点が指摘されてきたが、本指導法ではその欠点を補うことができる。

(3) 教材作成支援システム： 本システムは、教材全体の流れをJavaScriptで管理し、マルチメディア素材のデータベースをXMLで記述する仕組みとなっている。また、本システム専用のXMLコンバータを用いることで、マルチメディア情報が入力されたExcelファイルがXMLに自動変換されるため、新たな教材を制作するための時間と予算を大幅に削減することが可能となっている。

竹蓋順子, 「学習結果が定着する語彙指導システムの開発」, 『関東甲信越英語教育学会研究紀要』, 第13号, pp. 39-51, 1999.

4. 研究成果

研究分担者が所属する国内の大学にて、韓国語の授業を履修している学生、計318名を対象として実施したアンケート調査を実施した。それらの学習者は、韓国語学習歴が1年未満(81%)、1年以上が(19%)の学生であり、自らの語彙数に関して自己申告させた結果、「30語未満」である、と推測した学生が過半数であった。また、韓国語のリスニング力は、「簡単なあいさつ」(56%)、「全くできない」(22%)、「短く単純な会話」(17%)、「日常韓国語会話」(0%)、という結果であった。

一方、授業の履修目的で80%以上の学生が回答したものは、「韓国語でのあいさつができるようになること」(84%)、「韓国旅行での会話を習得すること」(80%)、「日常韓国語会話を習得すること」(80%)、「韓国語の文章を読む力を養成すること」(80%)であった。

このように韓国語の初級レベルにある日本人大学生の韓国語学習者のニーズに合致した教材となるよう、素材を吟味した。その

結果、教材のテーマは、次の 15 種が選定された。携帯電話のレンタル、ホテルにチェックイン、地下鉄に乗る、電話で約束する、友達を紹介してもらう、駅で切符を買う、小包を郵送する、電話で約束する、手紙を書く、韓国の交通事情、韓国の習い事、韓国の大学入試事情、大学生生活の思い出、韓国の兵役、韓国人の健康生活、の 15 種である。

本教材の根幹をなす教材の音声は、音声の品質、ひいては教材の質を保証するため、計 10 名のナレーターから 3 名を選抜し（韓国語母語話者の男性ナレーター、女性ナレーター、そして日本語話者のナレーター）、録音スタジオでの収録を行った。また、教材の随所において提示される、素材内容を理解させ、学習語彙の使用場面を意識させるための補助的役割を持つ静止画については、オーセンティックな教材とするため、現地（韓国）にて撮影された。

さらに、初級の韓国語学習者であっても効果的に自律学習が行えるようにするため、既存の語彙教材作成支援システムを韓国語用に一部特化する必要があり、以下の 2 点についてシステムを改修した。①学習ステップ 3（学習語彙の綴り及び音声、対応和訳が一覧で提示されるステップ）と学習者個人の単語帳において、韓国語の活用形を取扱えるようにした。なお活用形は、テキストのみならず音声を再生させることも可能にした。②学習ステップ 11（空欄のある短文を読み、学習語彙を想起して空欄にキーボードから入力するタスク。解答が分からない場合はヒントを表示させられる）のヒント表示方法について、文字単位で 1 語ずつ提示すると韓国語の場合はヒント情報が多すぎることになるので、字母単位でヒントを提示するように改修し、ヒントの情報量を制御した。

上記のシステム改修と並行して、ニーズ分析に基づいて選定された 15 種のテーマに基づき、8 種は韓国語の会話、残りの 7 種はモノログの文章が書きおろされ、その中で使用されている計 150 語の韓国語語彙が学習できる 15 セットの Web 教材が開発された（図 1～4 の画面例を参照のこと）。これは、3～4 か月の学習で完結する分量の教材である。



図 1 レッスン開始画面



図 2 学習語彙 10 語の一覧画面



図 3 フレーズに学習語彙を入力する画面



図4 リスニング問題の画面

平成 22 年度には、科研研究分担者が所属する国内の 3 つの大学にて教材の試用実験を行った結果、以下に示すように、学習者から概ね高い評価を得た。

ほとんどクリックひとつで学習できるので、とても気軽に取り組みました。なので、この教材で学習することを負担に思うことがありませんでした。むしろ、この教材なら、と進んで勉強できると思います。

単語が繰り返し勉強できて、ステップが進むごとに身に付くようでした。発音が聞けるので良かったです。

何回もくり返し、単語とその例文が出てくるので、とても頭に入りやすかった。

韓国に訪れた際に遭遇するであろう場面の会話だったのでイメージしやすかった。

本研究の成果は、次の 2 点に集約される。まず、指導法に忠実に則った韓国語重要語彙の学習教材を制作することにより、熟達度レベルや学習速度、興味の異なる学習者に対して、ニーズに即した教材を提供することができるようになった。また本教材はコースウェア化されているため、授業時間外を活用した自律学習が可能となった。このことにより、限られた授業時間を語彙学習以外の活動に有効利用できるようになり、学習者の熟達度レベルが上がった。

二つ目に、制作された韓国語教材の有用性が検証されたことにより、今後、本語彙指導法を英語や韓国語以外の言語へ応用できる可能性が高まった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 4 件)

- Takefuta, Junko, Mikyung Cho, Hyunjung Lim, Jin Kim (2010), “Development of a Korean Vocabulary Courseware,” 36th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Expo (Aichi Industry and Labor Center, Japan) 2010/11/20.
- 竹蓋順子, 曹美庚, 林炫情, 金眞 (2010) 「韓国語コミュニケーション能力養成のための語彙学習用 Web 教材の開発」 e-Learning 教育学会 第 8 回研究大会 (九州大学) 2010/3/13.
- 竹蓋順子 (2010) 「大阪大学での CALL 教材を使った英語教育」講演会『アカデミック・コミュニケーションのための英語 CALL 教材』(名古屋大学) 2010/3/4.
- 竹蓋順子, 曹美庚, 林炫情, 金眞 (2009) 「学習者のニーズに応じた韓国語語彙学習用 Web 教材の開発」, 日本教育工学会 第 25 回全国大会 (東京大学) 2009/9/19.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹蓋 順子 (TAKEFUTA JUNKO)
大阪大学・サイバーメディアセンター・
准教授
研究者番号：00352740

(2) 研究分担者

曹 美庚 (CHO MIKYUNG)
阪南大学・国際コミュニケーション学部・
教授
研究者番号：30351985

林 炫情 (LIM HYUNJUNG)
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：30412290

金 眞 (KIM JIN)
流通科学大学・商学部・非常勤講師
研究者番号：30441348